

二 贈進紙幣包み

覚えておくと便利な紙幣包み

結婚祝以外の、おめでたい場合に使う紙幣包みです。檀紙を使うと、格調が一段と高められます。水引は両輪結び(蝶結び)にします。



吉・凶について

日本には「陰」「陽」「吉」「凶」の哲学的法則があります。

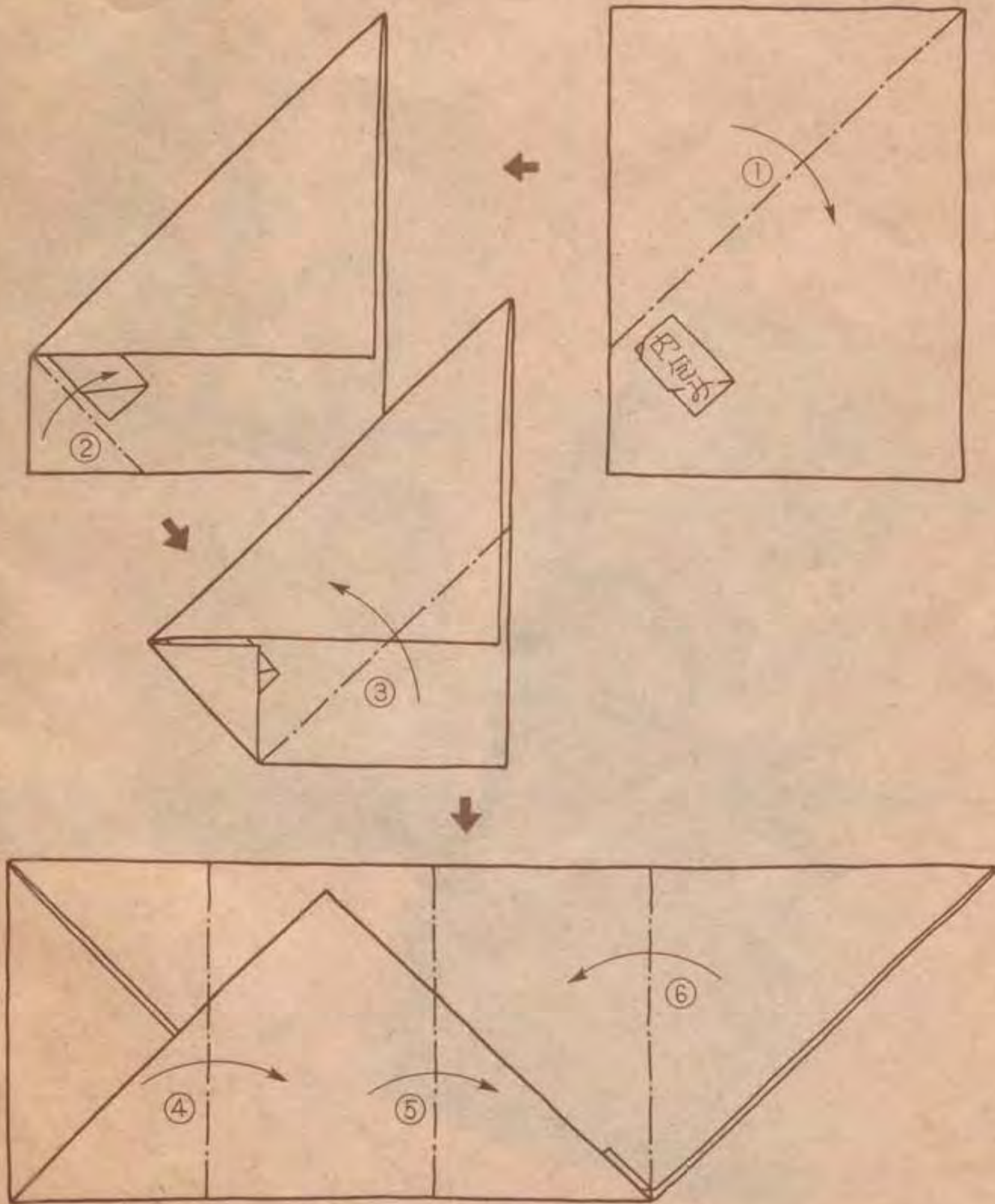
折形もこの法則に従って、吉事（慶び事）と凶事とがはっきりと区別されていきます。

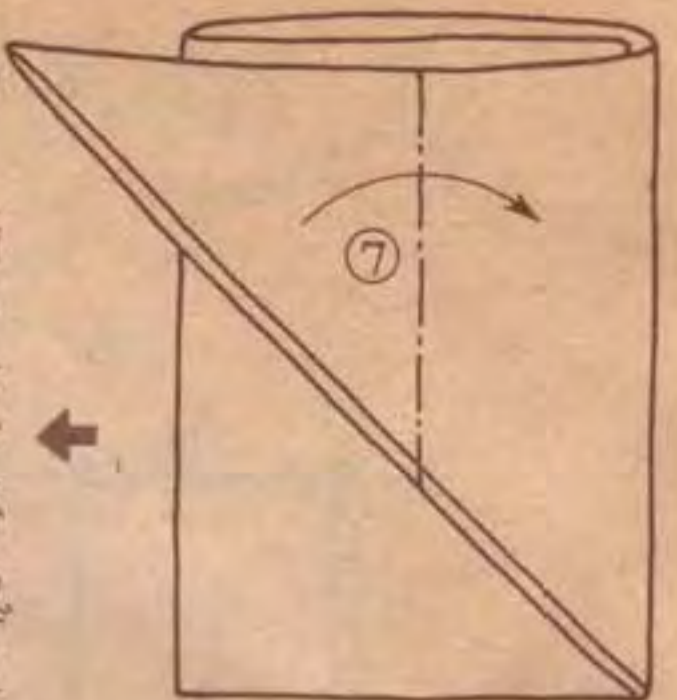
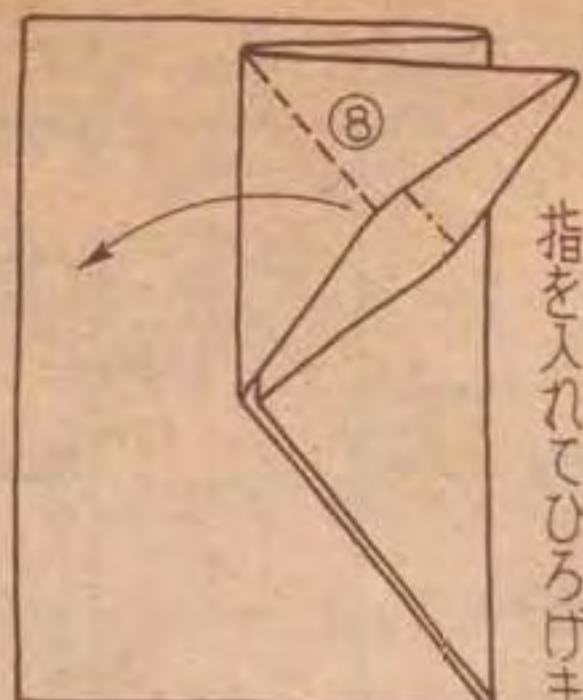
向かって右側が上になっている重なり方を「右前」といい、これが正常な形です。反対に左側が上になった形が「左前」で凶事の場合のみ、この重ね方をします。

慶び事は心が明るく開くという意から、吉事の場合はでき上がった折形を上より見た時、下側の紙の左端が見えるように、上側の紙を控えて重ねます。また凶事の場合は心を閉ざす意味で左前にした上側の紙をかぶせるようにして、下側の紙の端が見えないところまで重ね合わせます。表包みをタテに細長く折った後に、上部と下部とを山折りにして裏側へ返しますが、凶事以外はすべて上から折り下げた部分に、下から折り上げた部分が重なっていないなければなりません。慶びの心は天に向かって開き、悲しみの涙は大地にそそぐと頭に入れておくと、間違ふことは絶対ないでしょう。

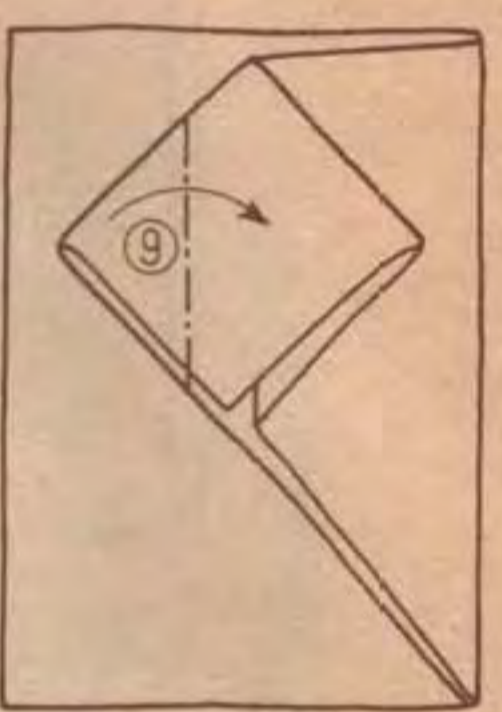
贈進紙幣包み、表包み(一)

吉 小高摺紙を使う場合

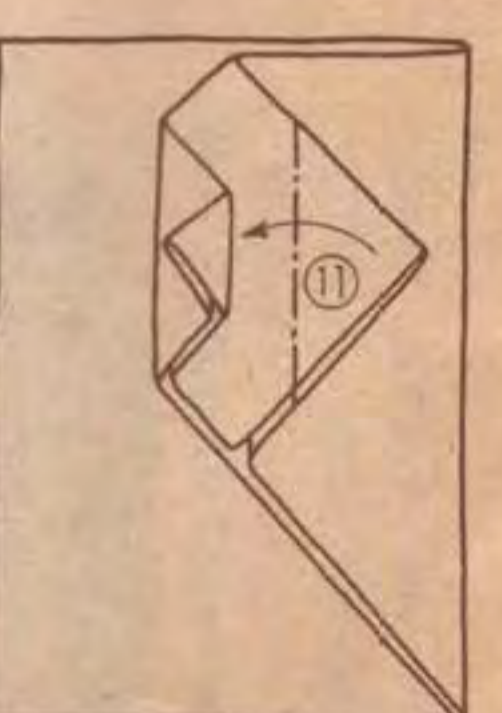
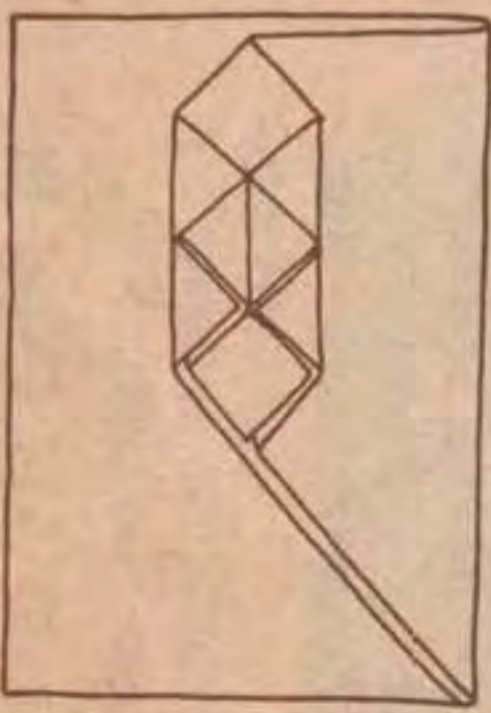




指を入れてひろげます

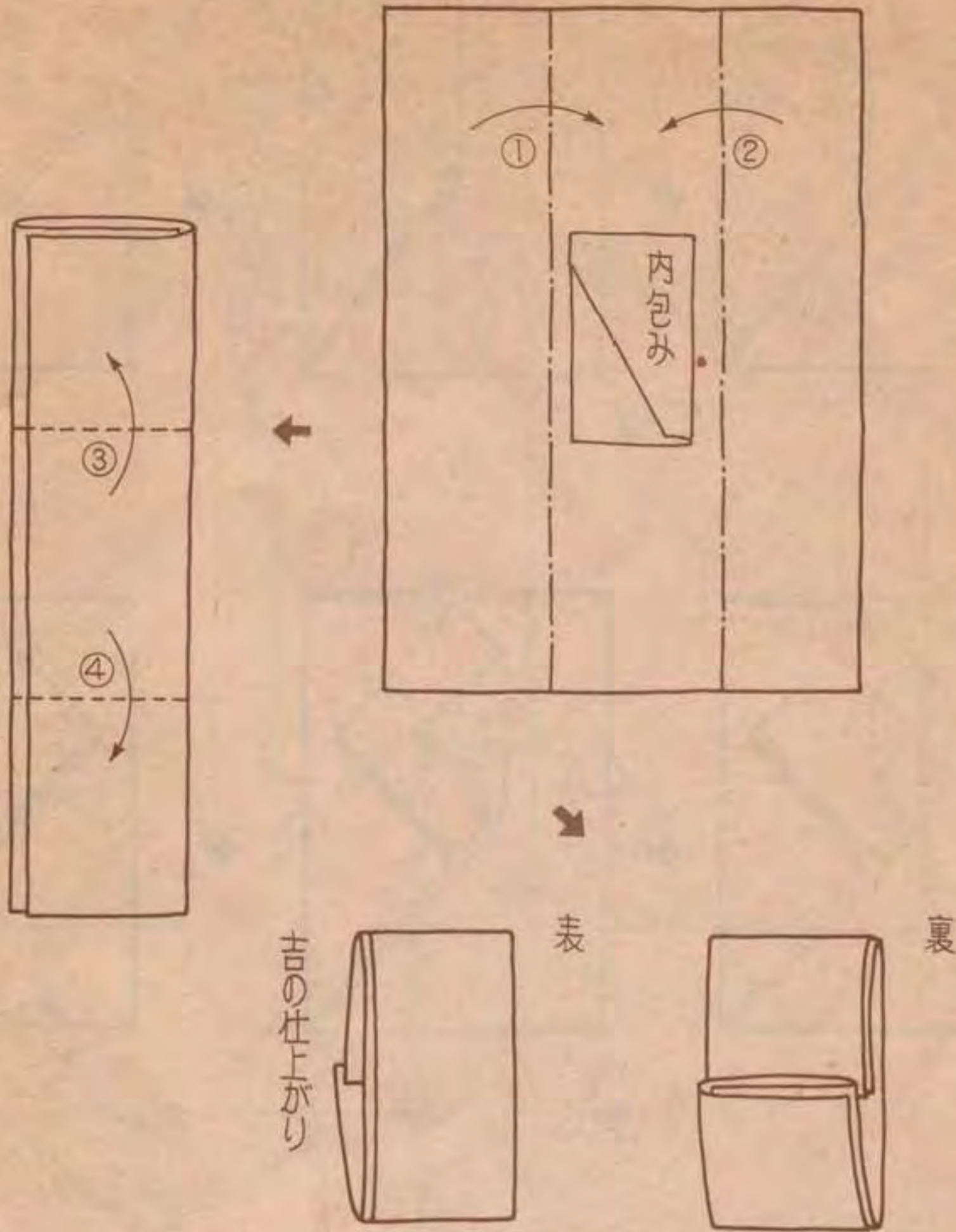


仕上がり



贈進紙幣包み、表包み(二) 吉

小高檀紙を使う場合



紙と水引について

折形で包む場合、檀紙、奉書糊入れなどの白く厚い風格のある和紙を使います。

「檀紙」表面に波状の皺(しぼ)がタテに出ている厚手の白い紙で、大高檀紙、中高檀紙、小高檀紙と三種の大きさがあります。「奉書」檀紙よりしぼが少なくてふんわりとした紙です。

「糊入れ」半紙より少し厚手で、一まわり大きいケバのある紙です。

「もみ紙」檀紙に次ぐ紙質のもので、赤、朱、朱赤などの染紙もあります。

「縁紅紙」四辺を紅で縁どった正方形のもので、大、中、小の三種があり、かいしきなどに使います。

進物は水引で結びます。

向かって左に白(銀)、右に染色したものがきます。吉には紅(金)、凶の場合は黒になります。結婚や凶は一度とないよう「結び切り」に結び、凶事の水引の先は、垂れ下がるようにします。